

---

# 想いは儚い

雪之丞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

想いは儚い

### 【Nコード】

N5333D

### 【作者名】

雪之丞

### 【あらすじ】

主人公・井出俊樹はある時期になると思い出に浸る。別れた彼女との思い出に…いつものように、いつもの場所で俊樹は彼女に想いをさせる…しかし、今回は少し特別な…忘れえぬ日になるのだ

## 第1話 春風と再会（前書き）

えー…恋愛っぽい感じなんで、ジャンル恋愛にしましたが…

正直、微妙です…

自分でもカテゴリわからん

## 第1話 春風と再会

寒い季節が終わり告げた

少しだけ暖かさを感じられるこの時期になると…

俺は、決まってある場所に足を運ぶ…

いつものように、その場所…

ごく普通の交差点に着くと、俺はガードレールに腰掛けた  
そして煙草を銜え、出勤に急ぐ人々を眺める。

春になったとはいえ、朝はまだ冷える日が多い

そんな中でも人々は寒さに耐え、白い息を吐きながらも歩みを進めていく

時々、俺の方を横目でチラリと見る人もいるが、その殆どは気にもとめずに素通りをする。

今の俺は、誰にも気にされない存在…

そう…それで構わない…

俺は誰かを探しているわけではない…

ましてや、何かを待っているわけでもない

ただ、ここにいただけだから…

そんな俺に気を止めるヤツなんて、中々いないだろう…

まあ、正直なところ気にされても困るんだが…

俺は煙草を吸い終わると、携帯灰皿に吸い殻を入れた

今の俺は…この吸い殻と同じ…

残りカスでしかない…

脱け殻になった今の俺には…

何もできやしない…

目の前を通り過ぎていく無数の人々…

その流れを見てみると、突然昔の記憶が走馬灯のように甦ってきた…

………

…そう…だから…

だからこそ、俺は此処にいるんだ…

ここに来れば…

（お前）との思い出を忘れないでいられるから…

自分でも未練がましいつて思う…

…こんな風に弱い俺のところ…

おまえは嫌いだったな…

それでも…

どんなに惨めであつても…

俺は最後の絆にしがみついている…

そんな感傷に浸る俺の前を、誰かの捨てたビニール袋が勢い良く通過していった

今日はいつもより風が強い…

空気もやけに冷たく感じる…

そうか…今日はあの日に良く似ているんだ…

お前と>別れる<ことになったあの日に…

出会いの時も…

別れの時さえも…

俺たちは風の中にいつもいた気がする…

お前がいなくなっってから…

一人で過ごすことにも大分慣れた…

けれども、俺は相変わらずダメなヤツだよ

独りの休日に…

俺は…何したら良いか解らないんだ…

お前が今の俺を見たら…

きっと笑っただろうな…

おまえの前で俺は…

強がってばかりだった気がする…

少しでも強い男であろうとしていたんだと思う…

お前をいつでも守れるような…

でも、冷たくしてしまうことも多かったと感じてるよ…

悪かったと思ってる…

本当に…

今、お前に逢えたなら…

伝えたいことが…

してやりたいことが…

沢山あるんだ…

願わくば…

もう一度逢いたい…

叶わない望みだと解っていても…

どのくらい時間が経っただろうか…

気が付くと、人通りが少なくなっていた

腕時計で時間を確認する

九時二十分…

どうやら通勤ラッシュの時間は過ぎたようだった

彼女のことを考えていると、いつも時間が経つのを忘れてしまっ…

(……これで静かに考えられる……)

周囲に人氣がなくなると、俺は再び自分の世界に入ろうとした…

しかし、その思惑は次の瞬間に阻まれることになる

不意に、誰かが隣に腰掛けた気配がしたのだ

だが、別に珍しいことではない

稀にいるのだ…



こういう物好きが…

何をしている？とか…

何故ここに居る？とか…

大抵は、どうでも良いような事を尋ねてくる

そして、俺がここに居る理由を答えてやると…

何も言えず…

何も言わずに去っていくのだ

決まったりきつたやり取りは…

ウンザリだ…

だから俺は、その人物を無視することに決めた

隣からは、仄かに甘い香りがする…

どうやら物好きは女のようなようだ

まあ、それが分かってても何も変わりはないが…

『何してんのよ…あんだ…』

唐突に隣人は話し掛けてきた

隣から発つせられた声は…

意外にも、俺にとって聞き覚えのあるものだった

俺は言い慣れた…

しかし、久しぶりに使う名前を呼んだ

『ゆきな  
雪菜…？』

春風と共に訪れた再会…

これは俺に何をもたらすんだろうか…

## 第2話 言葉は残酷

突然、聞こえた言葉。

それは聞き慣れた…

懐かしい声…

だが、俺の知っている…

昔の様な、柔らかく、朗らかな感じは無かった

何処か寂しげで…

無理に明るい声を作っている…

俺はそんな感じがした

声の主が誰だかは、無論すぐ解った

こくれ ゆきな  
木暮雪菜…

愛するという意味を覚えてくれた女性…

本当に好きだった彼女…

直ぐにでも振り返りたかった…

けど、振り返れなかったんだ…

俺には…

…勇気が無かったから…

『久しぶり〜敏樹<sup>としき</sup>。何してんの？』

昔と変わらない口調で、俺の名前を呼ぶ雪菜

だが、俺の口は動かなかった…

何て答えたら良いのか…

その時の俺には解らなかったから…

嬉しさとか…

驚きとか…

色々な感情が混ざりあって…

そう…あの時、俺はひどく混乱していたんだ…

くそ！…本当に情けない男だ…

『…なに無視してんの…？』

哀しげで…不安そうな問い掛け…

『もしかして…私のこと忘れた…とか？』

そんなこと…

あるわけ…あるわけない…

お前のことで…

忘れたことなんて…

何一つ無い…

『無視なんてしてねえよ…名前…ちゃんと呼んだじゃねえか…何の用だよ…』

これが…俺の…

虚勢を張った精一杯の言葉…

強がらなければ、崩れてしまいそうだったんだ

『相変わらず無愛想〜。』

俺の愛想無い返事を聞いて、雪菜が安堵したような気がした

『無愛想で…悪かったな…』

彼女のそんな感じに俺も安心する

『ま、敏樹が愛想良くて、気持ち悪いか〜。』

彼女は俺に馴染みある、からかう様な口調になっていた

『ふん…皮肉を言いに…わざわざ来たのかよ?』

そんな雪菜につられてか、俺も話し方が昔に戻っていく

『違う違う。何してるのか、聞きにきた』

相変わらず彼女を見ることはできないが、こつやつて話せるだけで…

今はいい…

『…>何してるか聞きにきたくって…なんだっていいだろ…』

つい、ぶっきらぼうに答えてしまう

『ふん…まあ、大体想像つくけど』

彼女は言葉に含みを持たせた

『…んだよ…』

少し小声で僅かばかりの反抗

『アホじゃない？昔の彼女引きずってさあ、どうすんの？』

からかう…というよりも少し小馬鹿にした感じで彼女は言った

『…悪いかよ。思い出すのは、お前にまだ愛情があるからだよ』

吐き出すように呟く

『うわゝ恥ずかしくない、それ？そして未練がましい台詞…。本当にアホな彼氏』

心の底から呆れたと言った感じの言い方

『うるせえよ…じゃあ、そんな俺と付き合っていたお前は、もっとアホな彼女じゃねえかよ』

売り言葉に買い言葉  
つい毒吐いてしまう

『あはは。それはいえてるかもね』

俺の皮肉など微塵も氣にとめず、彼女は笑い飛ばした

『マジで…アホだったよ、お前…』

昔のことを色々と思い出す  
良いことだけじゃない、悪いことさえも…

『ひどくない？てか、そんなに？そんなつもりはなかったけどな』

ちよつとムつとした感じ…

だが、それでも雪菜は会話を楽しんでいるように思える

『…いやいや、そんなにだから。だってよ、俺、はじめてみたよ。眼鏡を掛けて眼鏡探してる人。あれ、コントの中の世界だけかと思つてた、マジで笑ったわ』

『…うつさい！あれは寝呆けてただけ！』

俺の言葉を、笑いながらも全力で否定する

『へっ…起きて四時間もして、君は寝呆けるのかい?』

雪菜の矛盾に俺は突っ込む

『…なに?何が言いたいの?』

彼女の声が素のトーンになる  
でも、引くに引けない俺は畳み掛けた

『やばくない、それ?』

『やばくない』

はつきり言いきる彼女  
そんな彼女に対して俺は更に続ける

『変なところ、きっぱりしてるねえ、相変わらず』

『悪い?』

『いや…悪くないけどさ…』

雪菜のハッキリとした態度に、俺は一瞬圧された  
そして、怯んだ俺の口からは本音が流れだしていく  
多分…変わらない空気に油断したんだ

『でもさ、それ抜きにしても、お前はアホな彼女だったから…』

『だから、どこらへんがよ?』



『今、ここにいてること、とか…』

昔を思い出す

当然、あの日の事も…

『何？意味解んないんだけど？』

本当に分からないといった感じの雪菜の声

『…気が付いてないのか？』

呆れながらもホツとする俺

『…だから…なんなのよ！？』

突然キレる彼女

俺が言葉に含みを持たせるといつもこう…  
変わってない…相変わらずだ

『おまえさ…死んだんだぜ…？』

必死の思いで核心を吐き出した

使いたくなかった言葉…

…これは諸刃だ…

それでも…

言わなければならぬ事だったんだ…

### 第3話 想いは悲壮

俺はいつもそうだ…

無神経な言葉を使って大切な人を傷つける

俺が吐き出した…「もっとも言いたくなかった言葉」を聞くと、彼女からは哀しげな雰囲気が一瞬だけし…

『わかつてるわよ…そんなこと…』  
と、少し悲しそうな返事をした

『なんで…なんだよ…』

今でも、何故こんなことを言ったのかわからない  
自分でも意味なんてない…いや、解ってない質問だったと思う

『なんで…って…』

俺のした問い掛けに彼女は戸惑っていた

『……………何で死んじまっただんだよ……………』

吐き出された…本当の言葉…

もう抑えることなんて…できない…

『なに、帰り道に事故にあっただよ…俺が送るって言ったの拒否して…事故にあっただうすんだよ…大丈夫って…大丈夫って言うってたじゃねえかよ…全然、大丈夫じゃねえじゃんかよ…』

いつの間にか俺は泣いていた

この情けない姿が俺の本当の姿なんだ…

俺は惨めになりながらも言葉を続けてる…

『…しかも、飲酒運転だったらしいじゃないか…お前、全然悪くないじゃないかよ…何、俺より先に死んでんだよ…………俺より先に逝ったお前は…やっぱアホな彼女だよ…』

『……………』

俺の心を彼女は黙って聞いていた

何も言わず…

ただ…ただ黙っていた

『黙るなよ…なんとか言えよ…冷やかしに來ただけかよ…』  
こんな言葉を言うつつもりはなかった…  
責めるような言葉を…

『…あんたが馬鹿なことしないか心配だった…』  
包み込むような優しさのある彼女の声  
でも、とても辛そうだ…

『…なんだよ…馬鹿なことって…』

『例えば…復讐とか？』

さらりと言つ彼女

『…明るく言うなよ。大体…復讐する相手がいない…』  
ツツコミながらも、苦笑いになる

『なんで？』

『なんで、って…知らないのか…？……………お前をひいた相手…翌日に自殺してたんだよ…』

何処かに吐き出せたら…少しは楽になれたかもしれない…だが…

悲しみと憎しみに支配されていた時、警察から言われた宣告

容疑者は見つかりました

ですが…既に亡くなっていました

おそらくは自殺したものだと思われます…

何処にも行き場のなくなった思いは……………

己の内に閉じ込められた

『そつか…そうなんだ』

『ああ…』

あっけらかんと言う彼女に、俺は相槌を打つしかできなかった

『もしさ…』

『ん？』

トーンを落とした声

彼女がこの感じをする時はマジな話をする時だ

『もし…もしも相手が生きてたら…復讐した？』

声に怯えがある

聞くのを何か恐れているような…

『…どうかな…したかもしれないし、しなかったかもしれない…』

自分でも…答えは分からなかった

…俺は…どうした…？

『ちょっと！ハッキリしないなあ。仮にも彼女の仇を討とうとか  
考えないわけ？』

安心したのか、彼女の口調は再び仮面に覆われた

『…内緒…だな』

おもいつきり意地悪く答えた

『なによ、それ！』

彼女は呆れ気味だが、楽しげだ

こうしていると昔に戻ったみたいだ

でも、前とは…昔とは違う

何故なら…

俺はまだ彼女を見ることができていないんだから…

## 第4話 彼女の想い

…桜が見たい…

彼女は突然、そう言いだした

何故急に桜なのか解らないまま、俺は雪菜の後についていった程なくして着いた場所は、交差点から一番近い中学校の桜並木だった

移動中、俺はあることに気が付いた

彼女はどうかやら他の人には見えていないらしい

歩きながら彼女と話していたから、見かけた人は正直不気味だったろう

可笑しな電波を受信している人と思われていたかもしれない

あの時は全然気にならなかった…

だが、俺は相変わらず彼女を見れないでいた

気配や目端に見える人影、声で彼女がいることを確認していた

『綺麗だねえ〜』

彼女の無邪気にはしゃぐ声が聞こえる

『どうして、桜を見たかったんだよ?』

『だつてさあゝ…』

彼女は一呼吸置き

『一緒にお花見、したことなかったから…』

『そうか…』

『そうだよ。』

そういうと二人の間に暫らく沈黙が流れた

『あのさ…さっきの質問の答えなんだけどさ…』  
『…ん?』

唐突に彼女は口を開いた

『さっきの…何しにきたんだ?ってやつ』  
『ああゝ…』

心配だった…てヤツか…

『実はさ、もう一つあるんだよねゝ』  
『…もう一つって…何?』

『…あんたに逢いたかったんだ』  
『…』

『ま、総合的に言えば心配だった…かな?』  
少し悪戯っぽく彼女が言う

『って結局、同じじゃん!てか、死んだ人間に心配される俺ってダメじゃん!』

『何いつてんの？あんだダメ人間だから。自覚なし？』  
彼女はハッキリものを言う  
俺はそれが心地良かった

『えええええええ！かなり酷いんですけど！』  
大げさに驚いてみせる  
もちろん話の流れに任せた演技だ

『いやいや、死んだ人間に心配させるほうが酷いから』  
おどけて言う彼女の笑顔は可愛い…はずだ  
それを見れない自分が悔しかった

『心配させるなんて………そんなつもりはねえよ』  
口調が強くなってしまった  
自分に対しての、どうしようもない苛立ちが出てしまったんだと思う

『じゃあさ、何で命日と誕生日、毎年墓にくるわけ？』  
意地悪く、しかし悲しそうな声

『いいじゃん。迷惑掛けてねえし』  
全力での強がり

『あたし、そういうの嫌いって知ってるよね？かなり迷惑なんですけど？』

『迷惑って…どこがだよ？』

『全体的に重い』

『…俺の勝手だろうがよ…』  
実際は彼女の言う通りだったのかも知れない



だから、俺はハッキリ言い返せなかったんだ

『…あんたさ、あたしが死んでから…まともな生活…してくない？』

口調から悪戯っぽさが消えた

…淋しそうな声

『できないんだよ。前みたいには…』

彼女がいなくなつて、俺の心には大きな穴が空いた  
心はあの時から折れてしまった

『…本当、ダメだね』

『…自覚してるよ』

『…ふん』

俺の言葉を聞くと、彼女は何かを考え込んでいる

『で、今は…彼女いるの？』

『唐突だな、おい！…てか、分かるだろ…？』

『いいから！答えて！』

投げやりな答え方が気に障ったのか、彼女にしては珍しく強い口調  
だった

『なんだよ…急に……いないよ』

彼女の迫力に驚き、一瞬怯み、声のトーンが落ちる

『……だよね。じゃ結婚は？考えないの？』  
彼女は質問を畳み掛けてくる

『相手いないのに結婚ないだろ……』

『いや、考えるかどうかって話』

『……考えられないな』

俺の言葉を聞き、彼女が深い溜息を吐いたのが分かった。

暫しの沈黙の後、彼女はゆっくりと口を開いた

『あのさ……いい加減さ……忘れてよ……』

『……』

涙声だった

俺のせい……

俺が彼女を泣かせている……

『あんたの気持ち解るけどさ……逆の立場なら私もそうなるだろうし……』

『なら……』

言い掛けた俺の言葉を遮り、彼女は続ける

『相変わらず自己中だね……。私の……私の気持ちは考えてくれないの……？』

『それは…』

俺が何を言おうと言い訳でしかない

そして、感情的な彼女はそんな言葉を待っているわけではない

『ねえ！？どうしていつもそうなの！？何でそんなに自分勝手なのよ！？…最後なんだから…一つくらい…私の言う事聞いてくれないじゃない…』

『悪い…』

彼女がこんなに感情を表に出すなんて珍しかった

そんな彼女に俺は謝ることしかできなかった

最後…

その言葉が頭の中に駆け巡っていた

『あんたがそんなんだから…』

彼女の声が泣いていた

『ごめん…』

俺は自然に振り向いた

桜舞い散る中…

そこには昔と変わらない彼女が泣いていた…

俺は思ってたんだ

頭が変でも…

幻覚でも構わない…

この一瞬が…永遠に続けば良いと…

## 第5話 彼女の笑顔

彼女の姿を見てから、俺は他愛のないことを機関銃のように話し続けた

話が途切れたら彼女が消えてしまい感じがしたから…

いつのまにか陽が陰っていた  
空が雲で灰色に覆われていく

『あ、雨…』

突然、雨が滝のように降りだした

『おい、濡れ…』

彼女の方を見ると…

俺は見てしまった

彼女の体をすりぬけ、雨は地面を濡らしているのを

それを見たら…

どうしようもなく悔しくて…

俺は声を押し殺し…泣いていた

あの時の俺は…気が付いたら、彼女が濡れないよう、頭上に上着を広げていた

目の前の現実を受け入れなくなかったからなのか、今でもよく分らない

『私は大丈夫だから…だって…』

哀しげな声で、淋しそうな目をしながら彼女は言った

『いうな！…お願いだから…その先は…言わないでくれ…』

言い掛けた彼女の言葉を俺は遮った

その言葉の続きを聞きたくはなかったから…

俺は涙を流して泣いていた

情けないほどボロボロと…

悔しくて、悲しくて…

どうしようもなく涙が溢れた…

雨がそれを隠してくれたのが救いだっただけ…

これ以上…彼女に情けない姿を見せないで済むから…

『…ごめんね…励ましにきたつもりだったんだけどな…』

そんな俺を、彼女は悲しみと優しさの交じったような微笑みで見つめていた

『…ありがと…な…』

彼女に俺は、そんな言葉しか言えなかった

『…うん…あ、晴れたね…』

『…ああ…』

いつのまにか雨は上がり、空は晴れていた

『天気雨…だったのかな？』

『…かもな…』

彼女の声が落ち込んでいく

その感じで俺は理解した

あの雨は…合図だったのだ…と

『…じゃ、そろそろ行かなきゃ…』

『…そう…か…』

彼女との再びの別れ

もう…きつと奇跡は起こらないであろう…

『…うん…なんか色々と急で、ごめんね…』

はにかむように笑う彼女は…昔と変わらず愛らしい

『…謝んなよ…いや違うな…うん、良かったよ…』

自然に出てきた言葉だった

自分でも意味は良く分からない

『…何が?』

彼女のもつともな疑問

『いや…逢えてさ…』

単純な答えだ

『ん、そっか。なら来て良かったかな』

悪戯な笑みをする彼女

抱き締めたい気持ちを抑えるのが大変だ…

手を触れることは出来ないだろう  
きつとすり抜けてしまっただろうから…

『…ああ』

『頑張つてよ?』

『ああ…』

『腑抜けた返事だなあ。あんたはさ、あたしが好きになってあげた人なんだよ?もつとしっかりしてよね』

『ああ』

頭の中で彼女との思い出が回っている

『まったく…あ、そうそう…はい、これ』

小さな封筒を俺に渡す彼女

『なんだよ、これ』

受け取った手紙は本物だ  
面食らう俺

『プレゼント ほら、有り難がりなさいよ』

『え?てか、どうやって…』

俺の疑問を彼女は察して、直ぐに答えた



『それ、こっちに来て書いたから』  
簡単に言う彼女

『ああ、そうなん…』

『あ！もう時間ギリギリ！ヤバ！んじゃね！』  
昔と同じように去ろうとする彼女  
でも…もう>今度くはない…

いやだ…行かないでくれ…

なんで、そんなに普通なんだよ…

離れたくない…離したくない

だが、俺の口からは気持ちとは裏腹な言葉が出てきた

『うん、それじゃ…』  
最後まで格好つけて…

結局は素直になれなかった

彼女のいなくなった世界で…

俺はまた一人になるんだ…

## 第6話 最後の贈り物

彼女は俺に贈り物をして…逝った

去りぎわ…彼女は俺に口付けをした

そして…

気が付いた時には彼女はいなくなっていた…

『なんだよ…おまえは触れんのかよ…ずるいじゃねえかよ…』

俺は一人、彼女のいた場所を見つめながら、彼女の残した手紙を見つめていた

前略、敏樹

あなたがこの手紙を読む頃

私はまたあなたの前から居なくなってると思います

条件付きで来たから、かなり慌ただしかったんじゃないかな？

向こうも手続きだとかで、色々大変なんだよね

かなり無理してきたんだから、感謝しなよ！

あなたの様子、観てたけどさ…

…らしくないよ？

あなたは自分勝手、自己中が売りでしょ？

悩んで落ち込んでるなんて、ガラじゃないでしょ？

傍に居てあげられないのは、本当にゴメンだけど…

大丈夫！

あなたは私が信じた人なんだよ？

だから、もつと自分に自信もって！

うん、きつと上手くいくよ！

私が保障するよ！

あなたにお願いがあります

これから恋をして、また誰かを好きになってください

あなたは生きてるんだから

恋愛や仕事、しっかりやって、しっかり生きて！

それで結婚でもしてさ

奥さんと一緒にこっちにきなさいよ！

楽しみにしてるからね

あたしは向こうで気長に待ってる

言いたいこと

まだまだ沢山あるけど

長くなるから、次で最後にするね

あなたのこと

本当に好きでした

好きになってくれて  
ありがとう

付き合ってくれて  
ありがとう

ああー！はずい！  
こんなの私のキャラじゃないね

色々大変だと思うけど  
頑張りすぎないでね？

絶対に無理はしないでください

あなたは一人で抱え込む人だから…

それじゃ、また逢えるまで…

さよなら、敏樹

雪菜より

ああ…わかったよ  
ありがとな

もう後ろは見ない

お前に心配かけないよ

お前を忘れはしない

けれど過去には囚われない

俺、前に進んでみるよ

昔も

今も

俺は変わらずお前を愛してる

お前以上に愛せる人…見つけられるかな…

…いや、見つけないといけないな…

お前との約束…だものな

晴れない空はない…か

どんな雨もいつかは止む…

俺はこの青空の下を…これからどう歩くのだろっ…

## 第6話 最後の贈り物（後書き）

かなりグダグダになってしまいました…  
こんなのを最後まで読んでくださった方…感謝感激です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5333d/>

---

想いは儚い

2010年10月11日01時49分発行